保阪正康 東郷和彦『日本の領土問題－北方四島、竹島、尖閣諸島』
角川 one テーマ 21、2012 年

領土問題を冷静に考えるために

古川 浩司

近年、日本の領土問題に関する報道が取り上げられることが多くなった。2010 年の中国漁船の尖閣諸島領海への侵入、ロシアのメドベージェフ大統領（当時）の国後島訪問、2011 年の日本の国会議員への韓国入国拒否問題、そして最近では、再びロシア大統領の座に返り咲いたプーチン氏による北方領土解決への意欲を「引き分け」という言葉で示すなど、今後も幾度となく報道されることは間違いない。その一方で、これらの問題に対しては、日本国内では文献のみならずインターネットも含めて、日本の一方的（かつ、感情的）な主張が紹介されるばかりであり、「それではなぜ、非のないはずの日本の主張が相手国は認められないのか」という素朴な疑問に回答する書物はほとんど見られなかった。しかし近年、この問いに関して元外交官から、その経験をもとに、これまでの“通り一辺倒”ではない冷静な思考に基づく回答が示されるようになった。本書もその 1 冊である。

本書は、かつて外務省欧亜局長として、北方領土返還交渉に大いに関与しながら、結局はその目的を達成できないまま退官することを余儀なくされた東郷和彦氏の論考と、同氏と昭和史の評論家である保坂正康氏と同氏による上記の論考を踏まえた対談から構成されている。以下、その概要を紹介したい。

まず東郷氏は「まえがき」で、『戦後の領土交渉の中からいつのまにか「四島一括のみ、正義は我にあり」という神話が生まれ、やがてこの神話が現実であるという錯覚が蔓延し、現実を直視して何か言えば「大変なことになる」というムードが日本を覆って（4 頁）』おり、それが迷妄を生み出しているとする。そのため、『「領土神話」を打破するための具体的な道筋（13 頁）』、『それぞれの問題が日本外交においてもってきた本質的な意義とその違い（17 頁）』、そして『どうして、（それぞれの問題解決が：評者注）今でなければ手遅れになるのか（19 頁）』を訴えることを本書の目的としている。

以上の問題意識から、第一部の「外交交渉から見た領土問題」では、北方領土、竹島、尖閣諸島問題の経緯と現状を説明した上で、北方領土問題は「二十五年間の交渉に敗北した（第一章）」、竹島問題は「新しい議論が期待される（第二章）」、尖閣諸島は「 武力衝突の危険をはらむ（第三章）」と総括している。その上で、第二部「対談 領土問題を解決に導く発想とてがかり」では、第四章で「領土問題を考える前提」を確認した上で、北方領土問題には現実的対応が、竹島問題には共存と交流の探求が、尖閣諸島問題には抑止力と対話が、それぞれ必要であるとする（第五章～第七章）。そして最後に保阪氏による「あとがき」で締めくくれられている。

本書は、新書でありながら内容が充実していることに加え、引用元も詳細に書かれてい

ることから、領土問題の初学者にとっても非常にわかりやすく、かつ、理解を深めやすくなっている。また、重光葵の二島返還論、竹島主権の放棄と経済権益の確保、尖閣問題の国際司法裁判所への提訴など、これまでタブー視されてきた発想への言及は、他の類書には見られないものである。

また、境界研究者である評者の観点から見た場合、『「固有の領土論」に対するこだわり（73 頁）』により、『四島一括を掲げない者に対しては「固有の領土」侵す国賊であるかのような態度で臨む（同上）』ことが歴史的経緯に反するという指摘は、評者も協力している北海道大学グローバル COE プログラム（境界研究の拠点研究：スラブ・ユーラシアと世界）の拠点リーダーである岩下明裕氏が、昨年（2011 年）発刊された『世界』別冊 816 号に寄稿されたご論考（北方領土 「不法占拠」と「固有領土」の呪縛をどう乗り越えるか）と相通じるところがある。また、保阪氏による『日本の意見を国際的な場で正確に発信する（204 頁）』ことや『領土問題や歴史問題に関してやたらと威勢のいい発言をする評論家とか文筆家とかがいますが、海外ではそうした意見がどう見られているか考えるべきでしょう（204-205 頁）』という指摘は、既にささやかながらも私たち自身が経験していることでもある。そうした点では、私たちの現在行っている研究活動の方向性が間違っていないことを再認識させてもくれる。

一方、事が起きない限り無関心で、かつ、事が起きてもこれらの問題に対する理解が乏しい国会議員や官僚も含めた国民の大多数が、仮に本書を読んだとしても、それが問題解決に結びつくか否かという点に関しては疑問が残るであろう。例えば、北方領土問題に関して日本政府は、1991 年 10 月の中山太郎外務大臣のモスクワ訪問で「四島への日本の主権が確認されれば、実際の返還の時期、態様及び条件については柔軟に対応する」という「段階論」に政策変換をした。にもかかわらず、現在もその考え方が浸透していないばかりか、今なお日本の国家首脳や多くの国会議員ですら「四つ一緒に物理的に返ってくる」という意味での「四島一括返還」論を主張している事実を鑑みれば、東郷氏の危惧とは裏腹に 2012 年も領土問題に関しては進展がないのではないかと考える読者がほとんどではないであろうか。

しかしながら、上記の問題は、本書の意義を必ずしも減じるものではない。したがって、本書は、初学者はもちろん、境界研究者にとっても拝読する価値のある文献であると言える。なお、内容の理解を深めるために、文庫版となった東郷氏の『北方領土交渉秘録』（新潮文庫、2011 年）や本書と同じく新書である孫崎亨氏の『日本の国境問題 - 尖閣・竹島・北方領土』（ちくま新書・2011 年）と併せて読まれることを強く薦めたい（ちなみに、評者は、上記 3 冊を 2012 年度の境界研究ゼミのテキストとして活用する予定である）。

古川 浩司（ふるかわこうじ）
中京大学法学部准教授。専門は国際関係論、境界研究。研究テーマは、日本の国境政策と国際機関の運営評価